

## 岡山実験動物研究会の近況

会長 猪 貴 義

岡山実験動物研究会が誕生して、早や4年目を迎え、ここに、研究会報第4号をお手もとに届けることができるようになりました。幸い、関係者の本研究会に対する深いご理解と、絶えざるご支援とご鞭撻をいただき、会は、一步、一步、着実に前進してきているようにみられます。この機会に、関係各位に対し厚くお礼申しあげる次第です。

昨年度(昭和60年度)は、岡山大学薬学部、田坂賢二教授のもとで第7回、川崎医科大学、山下貢司教授のもとで第8回、ノートルダム清心女子大学、高橋正佑教授のもとで第9回の研究会を、それぞれ開催することができました。また、60年11月5日には、学術振興財団の招待で来日されたポーランドのワルシャワ癌研究所の Alina Czarnomska 博士を岡山大学農学部に招き「ポーランドにおいて新しく開発された近交系マウスならびに Congenic strain マウスについて」の演題で公開講演会を開催することができました。これらの会の詳細は本研究会報に掲載されておりますので、ご参考としていただければ幸いです。

会員は現在、約100名に達しました。有志26名で会を発足した当時を考えると、感慨無量のものがありますが、今後とも一層組織の充実をはかってゆきたいものと念願しております。幸い、年齢の若い層の会員も次第に増加し、会の運営に積極的に協力をいただいておりますので、将来に期待をかけております。

会員は岡山在住関係者だけでなく、少数ながら、中・四国地域、その他の地域からの参加もあり、将来、本研究会に対し積極的なご提言をいただけるものと期待しております。岡山実験動物研究会報は当初の編集方針として、主として実験動物、動物実験に関する総説、主張、提言、紹介(実験動物、動物実験法、実験手技、施設、集会、新刊図書など)を取扱い、当然のことながら、学会誌

に投稿するような original report は掲載しないことを申し合わせてきました。直接、研究会にご出席の機会の少ない遠隔地の会員の方々には、発言の場として、本研究会報を有効に活用されることを願っております。

去る昭和61年3月19・20日、東京において開催された、科学技術庁主催の「科学技術総合シンポジウム」のライフサイエンスセッションに出席してまいりました。そこには基調講演の一つとして、「実験動物の開発等に関する研究」がとりあげられております。ライフサイエンス研究の推進に関連して、それぞれの研究目的に適した新しい実験動物の開発・改良、良質の実験動物の生産供給体制の確立、動物実験法の改善と精度の向上などが強く要請されてきています。このような状況からも、本研究会の果す役割は今後一層重要となってくるものとみられます。本研究会は、本会報でしばしば申しあげてきたように、大学や学部、研究機関のわくを越えて、実験動物の側にある研究者と、userとしての動物実験の側にある研究者とが集まり、自由の雰囲気のもとで、相互の知識と情報の交流をはかることを目的として発足したものです。これまでに、専門領域を異にする広範な分野から多くの問題が提出され、討議が深められてきたようにみられます。時には公募演題を中心として、時には symposium を中心として、時には研究会そのもののあり方について卒直な意見が提出されてきたようにみられます。今後とも、このような卒直な議論のできる場を大切にし、本会が特色のある研究会として成長し、着実に発展することを願っております。

関係各位には、本研究会発展のために、引き続きご鞭撻とお力添えをたまわりますよう重ねてお願いする次第です。